
転生高校生の魔法生活

海犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生高校生の魔法生活

【Nコード】

N3129U

【作者名】

海犬

【あらすじ】

高校2年生の春。何かと運がない俺は、交通事故で命を落とした。目が覚めると俺は神殿のような場所にいて、神様と名乗る女性と出会った。そして天界？で色々あり、俺は別世界へ転生することに。転生先は………魔法が存在する世界だって！？魔法使い？魔物？悪魔？そんな奴ら俺のチート能力で………え？チート能力はあげない？

ちょっと不幸な転生高校生の織り成す異世界物語。（※この小説の主人公は、序盤から最強ではありません）

7／10 一部修正しました。ご迷惑をお掛けして申し訳ございません。

プロローグ（前書き）

こんにちは！！海犬です！！

処女作なので誤字、脱字などが多いと思いますんで、良ければ感想でお知らせください。

なるべく毎日更新したいと思いますんで、どうかよろしくお願いします。

なお、プロローグだけは短めになると思います。

プロローグ

神様は俺を嫌っている。

それを確信したのは去年のことだった。

俺が神頼みすると、確実に真逆の結果が返ってくる。始めはただ単に運が悪いただけだと思っていた。

しかしそれが15年間も続くと、さすがに疑問が湧いてくる。

本当に運が無いだけなのか？それとも俺の願いは真逆の結果で返ってくるようになっていくのか？などと、考えてしまう。

だから俺は悪い結果になるように願ってみた。

結果は………初めて願いが叶ったよ……

この時、この瞬間、俺は悟った。

ああ……俺は神様に嫌われているんだな……

第1話「神様に会っちゃいました。」

「……………???」

俺は目前に広がる光景を見て、呆然としていた。

石畳の床、白を基調とした石柱、まるで神殿のような場所に俺は立っていた。

意味がわからない。全くもって意味がわからない。どうして、こんな所にいるのかさえわからない。
ただ、気が付いたらここにいた。

少ない脳みそをフル稼働させて、今の状況を整理していると突然、目の前に光の渦のようなものが現れた。

あまりの眩しさに目を瞑り、腕を眼前へと持っていく。

光が現れてから数秒ほどたった時、

「こんにちは」

穏やかな女性の声が聞こえた。

光は既に止んだらしく、目はすんなりと開き、俺の前に立つ女性の姿を捉えた。

女性は聖母のような穏やかな顔つきと透き通るような銀髪をしてお

り、見る者を魅了するような神々しさを感じた。

「えっと……こんにちは？」

「ふふ……初めまして。龍宮 健太君」

女性はそう言って微笑む。

綺麗な人だなく。つうか、何で俺の名前知ってんだろう？

「あのー、なんでおr」ここがどこか知りたいのね？」

いや……何で名前を知っているのか訊こうとしたんだけど……。まあ、それも訊きたかったし別にいいか。

「ええ。で、ここは何処なんですか？」

「その事なんだけど……まず、自分が此処に来るまでの行動を思い出して欲しいの。そうすれば、答えにたどり着くから」

此処に来るまでの行動？ 確か……いつも通り学校に行って、授業して、学校から帰宅して……

「あああああああああああああ！！」

思い出した！ 確か帰り道の途中で、曲がり角から自転車飛び出してきてバックステップで避けたら、避けた所にトラックが突っ込んできたんだ！！！！

……ってことは……もしかして……

「俺、死んだ？」

「死にましたよ☆」

……マジで？ていうか、なんであんたは嬉しそうなんだ？

「あっ、死んだ時の映像見ます？踏まれたあんパンみたいですよ☆」
「い……いや、遠慮しとく……」

やべっ…想像したら吐きそうになった。

俺は出そうなものを気合いで押し止め、先程から気になっていた事を訊いた。

「俺が死んだってことは、此処は死後の世界かなんか？」

「いえ、此処は天界です」

「天界？」

「知らないんですか？天界というのは、主に神なd「知ってるから説明いらない！」……そうですか」

しかし天界ねえ……『神様』の住処に俺がいてもいいのかね？

「で？あんたは神様？」

ザコそんな奴だったら逃げてやる。死んだ後まで苛められてたまるか！！

「そうですね。申し遅れました。私はゼウスと申します」

親玉カヨ or z

「どうかなさいました？」

「ふふふ……苛めるなら苛めろよ……。生前、俺を苛めまくったくせに……死んだ後まで苛めますってか？……やれるもんならやって

みろ！！いつか苦しさを快樂と思えるほど、俺は成長するんだ！！」

即座に立ち上がり、ゼウスを威嚇する。

「被害妄想もほどほどにしてください。というか、発言がキモイです」

ゼウスは汚物を見るような視線を向けてくる。
いいさ！いつかその視線をも快樂に！！

「ほらほら！！どうした！？もっと、汚物を見るような視線を向けろよ！！アハハハハハハハハハハハ！！！」

「壊れましたか。まあ、こうなった原因は私たちのせいでもありませんし、一応sy「アハハハハハハハハハハ！！！」……少し黙れ☆」

「むぐッ……」

俺は突然現れた、荒縄と猿ぐつわによって動きを封じられた。

「話……聞いてくれます？」

ブンブンッ

俺は千切れんばかりに首を振って、肯定の意をしめた。
態度が変わりすぎ？

だって…ゼウスの後ろに、般若が見えたんだもん。

「それで話を戻しますけど……あなたは生前、不幸な事ばかりがあって、その不幸は私たちのせいだと思った。そうでしょ？」

コクコク

俺が首を振るとゼウスは、額に手を添えて溜め息を吐いた。

「それはあなたの勘違いです。確かにあなたが不幸になったことに、私たちは関係していますけど、別に私たちがあなたを不幸にしようなどと考えるはしませんよ？ 分かってくれました？」

コクコク

「分かってくれればいいんです。では、この先からは少し長くなるので、お茶でもしましょうか」

ゼウスが指パッチンをすると、俺を拘束していた荒縄と猿ぐつわが消え、代わりにテーブルと椅子、そしてティーセット一式が現れた。

「おっ、このマフィン旨いな」

「そうでしょう。あつ、このタルトもどうです？ ニンフ達が作ったんですよ☆」

今俺たちは、ゼウスの持ってきた菓子を食べながらお茶をしていた。
お…タルトうめえ」

「と、そろそろ本題に入りたいんですが？」

「ああ、いいぞ」

ゼウスは紅茶を一口飲んでからティーカップをテーブルに置き、話を始めた。

「まず、あなたが不幸になった原因から説明します」

俺としてもそれが一番聞きたかったので、ゼウスの言葉に頷いた。

「では、単刀直入に言います。あなたが不幸だったのは、世界に嫌われていたからです」

「世界って…スケールでけえ」

世界って何だよ。世界って。俺は世界にとって害虫かなんかか？

「世界ってさ、人を嫌ったりするもののなの？」

「いえ、本来そのような事はありません」

「じゃあ、どうして俺は嫌われてたんだ？」

俺は紅茶を飲みながらゼウスの答えを待つ。

「それは…あなたが『あの世界』にとって、害虫のようなものだったからです」

「ブフォッ!!」

「きゃっ……なんですかいきなり!!」

「わ、悪い。つい驚いて」

だって害虫だぜ? いきなり、あなたは世界にとってゴキのようなものです。なんて言われて見ろ。絶対吹くから。

「まったく。あくまで例えですよっ」

ちょっと怒り気味のゼウスは、どこから出したハンカチで服を拭きながら言った。

「つまりあなたは、世界にとって異分子だったということです」
「異分子?」

「ええ。異分子となった原因は2つほどあります。1つ、あなたは『あの世界』の人間じゃない。2つ、あな「ちょっと待った!!」
…なんですか?」

「あの世界の人間じゃない、ってどういうことだ?」

「そのことも説明しますから。いちいち話の腰を折るのは止めてくれます?」

「あ……すみません」

なんだろう……ゼウスが恐い…

「じゃあ話を続けます。

2つ、あなたは『あの世界』の人間が持つ、能力の容量を超えていた。以上が世界から異分子扱いされた要因です。では質問をどうぞ」
「ああ、色々訊きたいことがあるけど……とりあえず、俺が『あの世界』の人間じゃないってどういうことだ?」

「つまり、本来は『あの世界』ではなく『別の世界』で生まれる存在だった。と、いうことです」

「別の世界ね……じゃあ、どうして俺は『あの世界』に？」

俺が質問をすると、ゼウスは苦笑いをしながら言った。

「あー…その事なんですけどー…その…怒らない？」

なるほど。俺が怒る内容なわけね。

しかし、話してもらわないといけないからな。

だから…極上の笑顔で

「大丈夫。怒りませんよ」

「そ、そう！じゃあ話すわね！」

ゼウスはホッとした顔で…

「実は部下の仕事を手伝いながら、一緒にドラマを見てね。ラストシーンで部下が涙と鼻水で顔をビチャビチャにしちゃって……つい手元にある紙を渡しちゃったの。それで気づいた時には遅く……部下は涙と鼻水でベタベタになった紙を、丸めて後ろにポイしちゃったの。ポイされた紙は、ちょうど開いていた0157世界のゲートに入っちゃって……あっ…ゲートって言うのは、それぞれの世界に専用のゲートがあって、そこに審査に通った書類を入れることで、その世界で生まれることを許される。って感じのものなんだけど……その……部下が投げた紙っていうのが……あなたの書類だったの………テ、テへ☆」

とんでもない事を言った。

つまりこいつの部下は、生の振り分け作業的な大切な仕事をしてい

て、こいつは手伝いに行ったが真面目に仕事をせず、部下と2人でドラマ鑑賞。
部下が泣く。つい手元にあった大切な書類を渡す。しかも俺のやつ。部下がチーンしてポイ。ゲートとかいうのにゴール。俺、『あの世界』行き決定。

.....

「アハ☆」

「.....ア、アハ☆??」

プツンッ

「全部てめえのせいじゃねえかあああああああ!!!!!!」

「怒らないって言ったじゃない!!」

「話の内容にもよるんだよ!! つうか、てめえ最初とキャラ変わリすぎだろっ!!!!」

「ギャップがあるほうが人気でるのよ!!!!!!」

「ぶっちゃけてんじゃねええええ!!」

「うるさい!! ばーか!! ばーか!!」

「んだと!?! やんのかコラア!?!」

30分後

「はあ…はあ……とりあえず…それで許してやる……はあ…」

「いいわよ…はあ……そっちも頼むわよ…はあ……ん…はあ…」

俺たちは息を荒くしながらテーブルに突っ伏していた。

ちなみに停戦するのにあたって、2人で条件を出し合った。

ゼウス「今までの私を見なかったことにしろ」

俺「幸せを」

後に、この停戦条約は『人神停戦条約』と伝えられることになった。

「はあ……ふう……それじゃあ、続きをしましょうか…」

「ああ……その前にお茶をくれ…」

俺はゼウスの淹れたお茶を飲みながら、興奮していた自分を落ち着かせた。

「とりあえず俺が、本来『別の世界』の住人だってことは分かった。けど、能力の容量ってなんだ？俺はいたって普通の学生だぞ？」

そう。俺は生前から特に秀でた才能もない、普通の学生だった。強いて言えば、喧嘩が強い普通の学生ってところか？

「能力の容量……って言うより、存在しない力を持っているって言うほうがわかりやすいですね」

「存在しない力？超能力とかか？」

「いえ。そのようなものだったら、少ないですが居なくはないでしょう？

存在しない力とは、その世界に存在しない力のことをいいます」

「つまり、俺の本来の世界特有の力ってことか？」

「ええ。そういうことです」

別の世界の力か……。ファンタジーだな。いや、神様に会ってる時点でファンタジーか。

「なあ。俺の不幸の原因とかは良く分かった。

けど、今更だけど何で俺は天界なんかに住るんだ？」

「それは私が呼んだからです」

うん、それは分かってる。

「呼んだ理由ですが……」

この時、俺は思いもしなかった。

まさかゼウスが、あんなことをいうなんて。

「あなたには転生してもらいます」

—これが『俺』の始まりの言葉—

第2話「神様に会っちゃいました。その2」

「…………マジで？」

「マジです」

俺こと龍宮 健太（17歳…♂）は、主神ゼウス（年齢〓不明…♀
…だよな…？）に転生勧告を受けました。

「なあ…………マジで転生させてくれんの？」

「ええ。マジです」

「記憶は？」

「残したいなら、そうしますよ」

「チート能力は？」

「チートは無理だと思えますけど…………少なから能力も与えてあげます」

「ちなみにどんな世界？」

「魔法が存在する世界です」

「……………イ…………」

「…………イ？」

「イイイイヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「きゃあー！！」

「あんなに騒いでいたんですから、声を枯らすのは当然です」

「だって、うゝれゝじがっだんだもゝん」

「あなたは本当にバカですね」

ゼウスは呆れつつ、手に持っているティーカップを俺に渡す。

「その紅茶には魔法薬が入っているんで、のどの痛みもすぐに引く
と思いますよ」

「ザンゝギュゝ」

俺は紅茶を一気飲みした。

おお！喉ごしスツキリ！！

って…なぜアボカドの味がするんだ？

「あーあー、おお！ガラガラ声じゃない！」

「よく効くでしょ？」

「ああ。さすがポーシヨン」

「いえ、どちらかと言うと万能薬です」

「言われてみればそうだな。……って、話がズレてんだけど」

「ズラしたのはあなたでしょ？人のせいにしないでください」

「いや、人じゃなくて神だろ？」

「……訂正します。神のせいにしないでください」

なにかとノリのいいゼウスだった。

「そろそろ始めようぜ。それじゃあ続きをよろしく！」

「はあ……あなたが相手だと疲れます…」

つい先程まで俺達は本題に全く関係ない話をしていたのだ。
ゼウスは溜め息をついた後、話を切り出した。

「では先程申した通り、あなたには魔法世界に転生してもらいます」
「魔法世界が俺の本来の世界なら、俺にも魔力があるのか？」

「ありますよ。力の容量のことは覚えていますか？そこに当てはまるのが魔力になります」

ああ。確か存在しない力だっけ？

「そしてあなたには何かしらの力を与えて、転生してもらいます」

「おう。それでどんな力なんだ？」

「それを今から決めてもらいます」

ゼウスは席から立ち上がり、数歩歩いてから指パッチンをした。
すると先程まで何もなかった空間に、突如としてルーレットが現れた。

「では、これをどうぞ」

ゼウスは俺に近づき、一本のダーツを手渡してきた。

…って、

「なんだこれは？」

「え？ダーツですよ？」

「それは知ってる。俺が言いたいののは、何故ダーツがあるんだ？」

「フレン○パーク知らないんですか!？」

ゼウスは「こいつ遅れてる」とでも、言いたそうな顔で俺を見ました。

「それも知ってるよ！つうか何で能力を決める的に、タワシが書いてあるんだよ！！」

そう。何故か的にはタワシの欄もあったのだ。

てか、タワシ多っ！！

的の約3分の2をタワシの欄が占めていた。

「タワシ……良いじゃないですか、タワシ」

「意味がわかんねえ！？」

「いいからさっさと投げてください」

俺を急かすように手をヒラヒラとしている。

くそっ！こうなったらやってやんよ！！

こうみえても俺は高校まで弓道をやっていたので、目と集中力には自信がある。

一度目を瞑り、心を落ち着かせる。

「すう…はぁ…」

ゆっくりと目を開き、全神経をダーツへと向ける。

何でそんなに真剣なのか、だって？

この一投が転生後の人生を決めるからだよ。ちなみにいい能力だっ

たら転生後、俺無双。

ルーレットを見ながらゆつくりとモーションに入り、一気に投げ「
ターワーシ！！ターワーシ！！」
……すっぱ抜けた。

「……てめえ！！このクソ神！！」

ゼウスの首を片手で掴み、全身を持ち上げる。

「あっ……ちょ……首……しまっ……て……」

「だまれえ！！てめえのせいで俺のゆm「まだ諦めちゃダメよん！
ダーツを見て！！」

突然聞こえた声に反応し振り返る。

そこには先程すっぱ抜けたはずのダーツの矢が、大きな曲線を描いてルーレットへと向かっていた。

そして……ルーレットへと刺さった。

しかも刺さった場所にはタワシと書かれていない。

「マ……マジかよ……」

予想外の出来事で力が抜ける。

ドンッ

「デホツゴホツ……はああ…死ぬかと思ったじゃない!!」

ゼウスが下で何か言っているが気にしない。

ははっ…マジかよ。すげーな、おい。

俺はルーレットへ近づき書いてある文字を見る。

『身体能力超アップ☆』

……オツシャアアアアアアアアア!!!!
微妙だけど役に立つ能力だ!!

俺が歓喜に震えていると、誰かの手が肩にポンツと置かれる。

「あなたの強い願いがこの結果を出したのよん。今はただ歓喜に震えなさい」

その声は、肩に置かれた手のようにたくましい声だった。

………あれ?

ゼウスじゃないよな?

変な汗を額に滲ませながら、ゆっくりと振り返る。

「あら、どうかしたん?」

•
•
•
•
•

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！……！！」
化け物おおおのおおおのおおおお！！！」

「いやあん!!」

俺はその人物から素早く離れて身構える。

「だっ、誰だてめえ！？」

「ちよつと、ちよつとおん！いきなりどおしたのよおん」

その者は二メートルほどある身長と、たくましく艶のある筋肉を持つており、もっとも目をひいたのは紅いルージュと光沢のある頭部、それと背中に見える4枚の青く輝く羽だった。

簡潔に言えば、オカマ妖精。

警戒しながらオカマを睨んでいると、

「あら、ニンフ遅かったわね」

復活したゼウスが言葉を発した。

……こ、こいつが妖精……？……

「ごめんなさいねえん。仕事が長引いちゃって」

「まあ、気にしないで。あつゝ紹介するわね。転生後、あなたのサポートをしてくれるニンフよ」

「嘘だ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
！」

第3話「see you神様 いざ転生!!」(前書き)

こんにちわゝ、海犬でゝす。

更新するのが遅くなってしまってますいませんm(_ _)m

実はテストが近いんですよゝ

そういう訳ですから少しの間、更新を止めさせていただきます。

といっても、数学を超えればあとは何とかなるので、案外早く更新を再開すると思います。

とりあえず更新できない期間の分として、明日の内に3話ほど更新したいと思います

本当にご迷惑をお掛けします。

第3話「see you神様 いざ転生!!」

「じゃあ準備はいいかしら？」

「……ああ」

どうも。精神的に死に掛けてる龍宮健太です。

なんでも、これから転生を行うそうです。

先程の衝撃的な告白からここに至るまで、いろいろなことがありました。

やたらおっさん（オカマ妖精）が絡んできたり、きもいから逃げたら追いかけてくるし、ゼウスが「約束の能力ね☆」と言って、体が光ったと思ったら両手がタワシになってるし（もちろん直させたよ？ いや、タワシって痛いよね？）、そんな訳で俺は精神的にボロボロだ。

「もう。だからごめんって言ってるでしょ。いい加減元氣だしなさいよ」

「……………」ジー

「うう…わかったわよ！もう1つ願いを叶えてあげるからそれで許してよ！」

「マジで!？」

「立ち直るの早っ！」

はしゃぐ俺を見て、ゼウスはため息をつく。

「それで？いったい何をお願いするの？」

ゼウスの隣に立っているおっさんが、なにやら微笑みながら俺の言

葉を待っている。

「悪いけど能力を増やせとかは無理よ？」

ふふーん、そんなちっぽけな願いじゃないさ。
もっと俺の人生に関わる願いだよ。

「それで何にするの？」

「ああ。俺の願いは……この容姿を変えてくれ！！」

「……………は？」

俺の願いを聞いた2人は呆然としている。

そんなにおかしかったか？

「ああ……いや、もっと凄いことを言ってくると思ってた…」

「あたしもよん。てっきりあたしの貞操を狙ってくると思ってたわ

あ

「俺にとっちゃけっこうなお願いなんだけどな。それとてめえは黙
ってろ」

俺の願いが気に入らないのか、2人は納得してなさそうな表情をしている。

「なんだ？できないのか？」

「ううん。出来る出来ないの前に転生したら容姿もかわるの。私が
気になるのは、なんで容姿を変えようと思ったの？可愛いのに」

ゼウスの言葉に俺のこめかみが微かに動く。

なるほど……。こいつもあいつらと同類か……。

「あ、あれ？……もしかして怒ってる？」

「ああ……。お前が俺にトラウマを思い出させたからな……」

「ト……トラウマ？」

「お前……さっき俺に何て言った？」

「えっ……。転生したら容姿もかわるの。……だっけ？」

「もっと後だっ！！」

「ひっ……」

突然の怒声にビビりまくりのゼウス。それほど今の俺は怖いらしい。

「え、ええと。か、可愛いのに……？」

「なんだとコラァ！！」

「ひえ！？」

ああ……てめえは言っちゃいけないことを言っちゃったなあ。それも二度も！！（二度目はこいつが言わせた）

「な、なんで怒るの！？いいじゃない可愛いのっ！！」

「それは男に対する侮辱の言葉でしかないんだよ！！可愛い？ふざけんな！俺がこの顔でどれだけ苦労したことかっ！！」

姉さんには毎日のように女装を強いられっ！学校の女子にも女装を強いられ！学校では男に告白され！電車に乗れば痴漢され！しかもアイドルとしてスカウトされたり！ついには、おっさん（オカマ妖精じゃありません）に襲われそうになったこともあるんだぞ！！

それを可愛いからいいじゃない？てめえの顔も可愛いだるまさんフエイスにするぞ？ああ？！」

「う……うわあ……」

「なに哀れんだ目で見てるんだよ！！お、俺だってなあ……こ……こんなこと、お……おもいだ……しッ……たく……なかッ……った……のに……ッ……」

なんだろ……目から汗が…。

10分後

「落ち着いた？」

「……ん」

べ、別に泣いてなんかないんだからね！
ただ目の運動をしすぎて汗が出ただけよ！

「だ、大丈夫よ！きっと次は男らしい顔で生まれてくるから！だから、ほら！元気だして！ね？」

「……うん」

「じゃあさつさと転生しましょ！イケメンになるために！」

ゼウスが言い終えると、突然現れた青色の光が俺を包んでいく。

「転生後は幸せな人生を！いつてらっしゃい！！」

「……いつてきます…」

かなりgd gdな感じで、俺は魔法世界に転生しました。

「ムキイイイイ！！なんであたしが空気になってるのよおん！！」

第4話「いざ転生!!」って、いざいざ。」

「……………がん……………イ……………ア……………」

微かに声が聞こえる。

ああ…もう転生したのか…。しかし、ここはどこだ? 暗くて何も見えないぞ?

……………いや、理解できた。目が開いてないのね。

俺は目を開けようとするが、なぜか瞼に力が入らない。

あれ? 目が開かない。ていうか、なんか頭の方から圧迫感が…。
ちょ!?!? く…苦しいって!!

「もう……………し…が……………ば……………!」

へ、ヘルプ! その人助けて! あ! ちょ…き…きつい…。

圧迫感は徐々に下半身にまで向かってくる。

なんていうかあれだ。ちいさなトンネルに無理やり突っ込まれるような感じだ。

圧迫感が襲ってきってから数分。突然瞼ごしに光を感じた。
気がつけば圧迫感もなくなっている。

なんともいえない苦しさから開放されると同時に、何かに包まれる
ような感じがした。

「イ、イリア！男の子だ！男の子だぞ！！」

うわ！？耳元で突然騒ぐなっ！

つうか、お前誰だよ！？

「イリア！ほら、俺たちの子供だ！」

「…はあ…はあ…あら…ケインよりも…私似かしら…」

「ああ！目元なんてお前そっくりだ！」

なるほど。おふたりは赤ちゃんを授かったのですね。

どれ。私にも見せてくれませんか？

こう見えても結構子供好きなんですよ、私。

…って、そういえば目が開かないんでしたっけハハハハハハハハハハ。

「それにしても…なぜ泣かないのかしら？」

「きっと知的な子なんだよ、イリア！」

親バカですね。でも、その気持ちわかります。

それと、お前いい加減うるさいんだけど。耳が痛いから黙れ☆

「ああ！この子はなんて可愛いんだろう！」

だ・か・ら・

「ほぎゃあ！おぎゃあああああああああ！！（お前は！黙
ってろおおおおおおお！！）」

.....

あれ？舌がうまく回らない…。

「ほぎゃあ。おぎゃおぎゃあ☆（俺は龍宮健太。不幸な転生高校生☆）」

マジかよorz

俺が落胆していると、男（おそらく親父）が高らかに宣言する。

「お前はケン・F・アステミア。俺たちの息子だ！」

こうして俺の転生生活は始まりを告げた。

第5話「アステミア家の食卓」(前書き)

テスト勉強で若干グロッキーになっている海犬です。

今日のうちに3話投稿なんていきまいてたんですが、無理そうです。

調子乗ってました。すみませんm(_ _)m

ですが、明日には2話投稿するんでご勘弁を。

第5話「アステミア家の食卓」

窓から射す光と小鳥たちのさえずりが、少女を夢の世界から現実へと引き戻す。

少女は、朝の気だるさに抗いながらベットからクローゼットへと移動し、寝巻きから私服へと着替え、クローゼットの横へ配置されている鏡と向かい合う。

「……はあ」

少女は鏡に写る自分の姿を見てため息をつく。

鏡に映る少女は、糸のように細く腰まである銀の髪をもっており、やや橙色が混ざった黄色の瞳、触れれば壊れてしまいそうな身体、一見すればかなりの美少女なのだが、この美少女はちょっとした訳ありだ。

龍宮健太。この美少女の生前の名である。

そう。この美少女、実は5年前に転生してきた転生者なのだ。

この世界での名は、ケン・F・アステミア。性別…男

つまるところ、この美少女は男の娘なのである。

「結局、男の娘という呪縛に縛りつけられるのか……」

美少女（偽）の一日が始まる。

「おはよう、ケン」

食堂へと入っていった俺に、最初に声をかけてきたのは父さんだった。

ケイン・アステミア。俺の父であり、ここら周辺を治めている侯爵

だ。

なんでも昔は、王家騎士団の騎士団長を務めていたほどの豪傑だったらしい。

短い茶髪に黄色い瞳、むかつくほどイケメソ野郎だ。

「おはようケンちゃん」

この人は、イリア・F・アステミア。俺の母だ。

ちなみにFとはフィーランドである。俺のミドルネームも母さんゆずりだ。

少々癖のあるロングの銀髪に、青い瞳、優しそうな顔つきをした穏やかな人だ。どっかの銀髪と違ってな。

「おはようございます！おねえさま！」

最後に妹である、イスズ・F・アステミア。歳は俺のひとつ下だ。

なぜか俺を、おねえさまと呼ぶ元気っ娘だ。

茶髪のツインテールに青い瞳、どこぞの魔法少女に似ている美少女だ。

「おはよう父さん、母さん、イスズ。あとお姉様ではなく、お兄様だ」

家族に挨拶を交わしながら席へと着く。

右（上座）には父さん、正面に母さん、左にはイスズが座っている。

「失礼します。ケン様」

俺が席に着くと端に控えていたメイドのセルビアが、グラスに水を注ぐ。

「ありがと、セルビア」

「いえ」

そう返してセルビアは再び部屋の端へと向かう。

セルビアは3年ほど前から働いているメイドさんだ。歳は18でお姉さんのような人だ。

青い髪をポニーテールにしている、ボインでクールなメイドさんだ。

「セルビア」

「はい。なんでもございましょう?」

俺はセルビアに顔を向ける。

顔を向けるとき視界に入った父さんは、にやけて口を押さえていた。

あゝ、その様子だと気づいてないみたいだね。
てか、父さんきめえ。

「エプロン付け忘れてるよ?」

「へ?」

俺の言葉に間を抜けた言葉を発しながら、視線を自分の身体へと向ける。

「はうっ!? し、失礼します!／／／」

セルビアは顔を赤くして、食堂から走って出て行った。

抜けたところが可愛いメイドさんです。

「魔力審査？」

「ああ」

食事を始めてから少したった時、父さんが「魔力審査に行くぞ」と言ってきた。

この世界には5つの大陸がある。

南西に位置する『メルガン』、西に位置するここ『ローレン』、北に位置する『アーライオ』、東に位置する巨大な大陸『ゼルス』、中央に位置する小大陸『ハウダン』

俺たちが住む大陸『ローレン』では、4〜8歳の間に魔力審査を行う決まりがある。

無料なので平民なども手軽に受けられる。

ちなみに魔力に遺伝はあまり関係しない。まあ、関係なくもないが。だから親が魔力なしでも、子供は魔力ありなどたまにある。

両親ともに魔力ありなら、魔力ありの子供が絶対生まれるらしいけど。

で、魔力審査とはどのようなものかというところ、潜在魔力値、魔力属性、特異魔力、魔紅石変換この4つに分かれている。

「それで、いつ行くの？」

「明日だ」

突然だなおいっ！！

「お前たちも早くに、自分の魔力について知つていたほうがいいだろう」

「あらあら、そんなこといっちゃって。本当は、自分が早くこの子たちに魔法を教えてあげたいんでしょう？」

「うっ…」

母さんの言葉が凶星なのか、父さんは顔を赤くした。

いい年して顔赤くすんなよ。きめえ。

でも、魔力審査かぁ。うん。早く自分の能力を知りたい。

そんなもって目指すは、俺無双。

……今思い出したんだけど、ゼウスとおっさん元気かな？
最後に話したのいつだったけ？

そんなこんなで、今日も平和なアステミア家でした。

第6話「はじめての都市です。」

みなさんこんにちは。ケン・F・アステミアです。

俺たちアステミア一家は魔力審査のため、最寄の都市『商業都市ガリアス』へと向かっています。

一家と言っても、母さんは留守番ですが。

「旦那様、そろそろガリアスへと到着いたします」

馬車を操っている執事のギルレイさん。温和なお爺さん執事だ。今回は俺、イスズ、父さん、ギルレイさんの4人旅だ。

「イスズ、もう着くからから起きて」

「……んにゃ……」

俺に身体を預け気持ちよさそうに寝ているイスズ。

イスズの寝顔に少々萌えながら、起こすために肩を揺らす。ロリコンだって？ 子供が好きなだけさ。

「んー、起きる気配なし。どうする父さん？」

「ふ…ケンもまだまだだな。パパに任せろ」

父さんは自信満々に言ってから、イスズの肩に手を乗せ……

「どれ、パパが目覚めのキスを…」

「やめろクソ親父iiiiiiiiiiii!!」 ドゴッ!!
「ブッ!!」

バキ!! ドタン!!!!!!

え? 何したかって?

顔面にハイキックくらわして馬車から落としただけだよ? まあ、死んではないだろ。手加減したし。

「…んにゅ…ん、おねくさま? どうかありませんでした?」

「大丈夫。イスズは俺が守るから」

そつとイスズを抱き寄せる。

「???」

イスズはよく分からないといった顔をしている。

イスズ、知らないほうが良いこともこの世にはあるんだよ。

「坊ちゃん、旦那様は何処へ?」

ギルレイさん、耳鼻科行くことをおすすめます。

「ふぁー、すごーい！」

「凄い活気があるね」

ガリアスへと到着した俺たちは、走る馬車から街道の様子を名が待っている。

それにしても凄い。街道の横幅は馬車でも余裕に通れるほど広さがあり、街道に並ぶ露店や店などもかなりの賑わいを見せている。

「それで？俺たちは何処に向かっているの？」

「父さんの親友の屋敷だよ。魔力審査も明日からだし、顔を出しにいくかなと思ってな」

「ん？父さん友達いたんだ？」

「……息子よ…反抗期なのか？」

父さんの言葉に微笑みを返して、再び馬車の外を眺める。

父さんがギルレイさんに向かって何か言っていたが気にしない。

で、着きました父さん親友宅。

うん、でかいね。うちの2倍はあるね。

白を貴重とした3階立ての屋敷で、おおきな庭園とバカでかい門が格式の高さを思わせる。

しばらくして、門番の人と話しをつけていた父さんが戻ってきた。

「行くぞ、お前たち」

父さんはそれだけを告げると、案内人の執事の後をついていった。
俺、イスズ、最後にギルレイさんが父さんにつづく。

——この時の俺は気づいてなかった——

——屋敷から俺を舐めまわすように見ている人物がいることに——

第7話「なにこの可愛い生物。」

「やあケイン。久しぶりだね」

「おお！ラルク！4年ぶりだな。元気だったか？」

「見てのとおりだよ」

屋敷へ入った俺たちを待っていたのは、2人の男女とその子供と思わしき女の子だった。

で、父さんと仲良さげに話している人物は……誰だっけ？

たぶん会ったことはあると思うけど、どうしても名前が……ん………
………考えんのめんどくせ。とりあえず優男で。

優男は肩まである黒髪に茶色の瞳、銀縁の眼鏡をかけている忌まわしきイケメソ野郎だ。

「そっちは変わってなさそうねケイン」

「そういうお前もあんま変わってねえな」

そういつて父さんと、赤色のドレスの女性は笑いあう。

この人は確か……何だっけ？

まあいいや。赤ドレ（今命名）は、後ろでお団子っぽくなってる栗色の髪、ルビーのような瞳にツリ目が印象的な美人さんだ。

俺が赤ドレを観察していると、優男……そういえば父さんがラルクって言ってたな。

ラルクさんが俺たちに声をかけてきた。

「ギルレイさん、お久しぶりです」

「ラルク様、お元気そうで何よりです」

2人して懐かしむように微笑みあう。
あいさつを終えたラルクさんはしゃがみこみ、イスズ視線に合わせて、

「大きくなったね、イスズちゃん」

「?????」

「ああ、君に会ったのは生まれてすぐだから覚えてないか。じゃあ改めてよろしくイスズちゃん。僕はラルク・レインフォードだ」

「え、えと、イスズ・F・アステミアです！よ、よろしくおねがいします！」

「うん、よろしく」

おおっ！それぞれ。ラルク・レインフォードさんだ。

で、あっちがアンナ・レインフォードさんだ。思い出した思い出した。

「えーっと、君は始めましてだね」

ラルクさんは俺に視線を移してそう言う。

あれ？忘れられてる？

ラルクさんは微笑みながら、

「可愛いお嬢さん、良かったらお名前をお聞かせ願いませんか？」

ん？お・じょ・う・さ・ん？

ラルクさんの肩越しに父さんを見る。

「……ぷっ……クッ……ブフッ……」

プツンッ

「アハ☆」

「ん？握手かい？僕はラルク・レインフォード。よろしく、可愛らしいおツ！！イタタツ！！ちょ、ちょっと！？力がつよツ！タタタツ！！」ミシミシッ

「アハ☆」

「お、お願いだから、少し力を！お、お嬢S「アハ☆☆」あああああぁー！！！」

「お、おねえさま！？やりすぎです！」
「ちっ」

手を離すとラルクさんは、苦笑いをしながら俺をみている。
後ろではアンナさん啞然。女の子涙目。

「な、何か気に障ったかな？お、おZY「ケン・F・アステミア。お久しぶりです、ラルクさん」……へ？」

「ぶはッ！！ハハハハハハハハ！！」

俺の言葉にラルクさん呆然。父さんはラルクさんを見て爆笑している。

いいもん。どうせ俺は男の娘だよ！

「さっきは悪かったね、ケンくん」

「いえ、俺もやりすぎましたし…」

俺たちは先程いたロビーからラルクさんの案内で応接室のような場所に通され、今はみんなでティータイム。

「しかしイスズちゃんもケン君もかわッ、か、かっこよくなったね！」

ひどいですアンナさん…。

俺は自分の容姿を恨みながら、先程から一言もしゃべっていないイスズへと視線を向ける。

「……………」

「どうかした？イスズ。」

「……………」

イスズは俺の言葉にも反応せずに、ある一点をまじまじと見つめている。

俺はイスズの視線の先を見る。

そこにはアンナさんの座っているソファの後ろに立っている、先

程の女の子がいた。

「…………ひゃう／＼／」

俺の視線に気づいた女の子は、顔を赤くしてソファアの陰へと隠れてしまう。

そして、そくつと様子を伺うように出てきては

「…………ひゃう／＼／」

引っ込む。

出てきては

「…………ひゃう／＼／」

引っ込む。

なにあの可愛い生物。

隣を見るとイスズも顔を赤くして、にやけながら女の子を見ている。まさかイスズ…………レズッ気があるのか？

だが今はそんなことどうでもいい。

早くあの女の子を観察して、

「ひゃう／＼／」

はうっ／／／

「なあ、さっきから気になっていたんだが……その子、ミーナちゃんだよな？」

俺とイスズが至福のひと時をあじわっている時、父さんが突然そんなことを言いだした。

なっ！そんなことを言い出したら至福の時間がおw ゾクッ！！

「……………」ギロリッ

突然の寒気に隣を見ると、イスズが父さんを睨めつけていた。さ、さすが魔王のそっくりさん。眼力がハンパねーっす……。

「あ、ああ！　そういえば。ミ、ミーナ皆さんに挨拶なさい」

アンナさんもイスズの威圧に気づいたのか、若干声が震えながらミーナちゃんに言う。

アンナさんに言われたミーナちゃんは、顔を真っ赤にしながらちよこちよこと、ソファアの陰から出てくる。

はう／／可愛いnッ！威圧感が治まった！？

恐る恐る隣を見てみると………いつものイスズに戻っていた。

グッジョブ！ミーナちゃん！

顔を赤くしたミーナちゃんは、俺たちの前まで歩いてきた。

ミーナちゃんの容姿は、肩まで伸びた明るい栗色の髪にルビー色のクリクリな瞳、花の装飾がある髪止め、それに白いワンピースを着ていた。

身長はイスズほどで小動物のようにかわいい。

「あう……そ、そのお……ミ、ミーナ・レインフォード……です……よ、よろしきゅッ……あうう／＼／」

「ブハア！！」

「イ、イスズー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ミーナちゃんのそうとう萌える自己紹介に、イスズは耐え切れず鼻血を噴射させてしまった。

あ、あぶねえ……俺もやるところだった。

「ちよっ！！ イスズちゃん大丈夫かい！」

「お、お嬢様!？」

「イスズ！急にどうした！？」

「だ、だれか！ 医者をやんで！！」

「はううう／＼／＼／」

この場にいる全員が慌てる中で、俺の腕に抱かれたイスズは片手を天に向け……

「わ……我が生涯に……一片の悔い無し……」　ガクツ

「イスズー!」

イスズは散っていった。

つか、なんでイスズが知ってんの？

今日の教訓

——萌えキャラの、歩む道に敵無し——

第8話「天使と変態と魔王です。」（前書き）

こんにちは、海犬です！

今回は更新が遅れてしまい誠に申し訳ございません。

次回からは、なるべく早く更新できるように心掛けます。

本当にご迷惑をおかけしました。

第8話「天使と変態と魔王です。」

イスズが逝ってから数時間後。

俺たちは夕飯をご馳走になった。しかもここに滞在する間、部屋も貸してくれることになった。

レインフォード夫妻マジ感謝。

で、今は食事を終えて寝るまでの自由時間。大人組は昔のことを語り合いながら飲んでいる。イスズは昼間のこともあってか、早々にダウン。残された俺とミーナちゃんは・・・

「だからね、とくいもちはあ、国からも期待されてるんだよ」

「なるほど。しかしすごいね、ミーナちゃんは」なでなで

「えへへえ／＼／＼」

子供部屋でミーナちゃんによる魔法講座を受けていました。

頭を撫でられ、嬉しそうに目を細めるミーナちゃんを見て微笑む。初めて会った時とはうってかわって、ミーナちゃんは俺にベタベタだ。

まっ、これが俺の実力ってところかな、ハハハハハハハハ。

「ねえさまあゝ」ごろごろ

「よしよし」なでなで

まだ勘違いしてるようだが……。

と、無駄話はさておき、ミーナちゃんはすごい。

なにが凄いかと言うと、5歳でもう魔法のあり方や歴史を知っているからだ。

ミーナちゃんから聞いたことは、主に魔法と魔力に関することだ。これらを整理すると、魔法とは魔力を消費して発動、またはマジックアイテムを使つての発動。他にもいろいろな方法はあるらしいが、主にこの2つが魔法を使うための一般的な方法らしい。

次に魔力。魔力とは魔力属性や特異魔力などの総称のようだ。

魔力属性とは『火』や『水』『闇』などといった、誰でも知っているような魔法属性のことだ。

それに比べ特異魔力というのはなかなかややこしい。

魔力属性の派生、またはどの属性にも属さない特有魔力。例をあげれば、アンナさんは『蒼炎』の特異魔力を持っているらしい。

『蒼炎』は通常の火属性よりも炎の威力が高く、火属性攻撃魔法に優れた蒼き炎。火属性の派生系特異魔力だ。

このように特異魔力を有しているものを、特異持ちと言うらしい。そして特異持ちが国から重宝される訳は、特異持ちは50人に1人の確立で発見されるらしく、なかなか珍しいらしいということ。

極め付けに、特異持ちは魔法分野に関して無限の可能性を持っているということだ。

この2つのことがあってか、特異持ちは時に優遇され、時に妬まれる。

これが現在の特異持ちの在りかた。

何処の世界でも人は、才能や特別という言葉に過敏に反応するものなんだね。

と、ここまでが今回ミーナちゃんに教わったこと。

魔法に関しては少し分かったけど、やっぱり自分も勉強してもっと知識をつけたほうがいいな。

「ねえさま?」

「ああっ、ごめん。少しぼーっとしてたよ」

心配そうに俺の顔を覗き込んでいたミーナちゃんの頭を撫でる。
するとミーナちゃんは、太陽のような笑顔で再び抱きついてきた。

「はは、ミーナちゃんは可愛いな」なでなで
「んにゅう……あっ、ねえさま!」

子猫モードに入っていたミーナちゃんが突然何かに気づいたように
俺から離れ、窓へと向かっていった。

「わあああ…ねえさま!雷光虫が!」
「ん?どれどれ」

窓の縁に手をついて身を乗り出しながら、外を眺めているミーナち
ゃんのもとへと向かった。

そして窓から見える庭園を見て、俺は思わず息をのむ。

「これは…すごいな…」

「うん。すっつごくきれいだね、ねえさま」

「ああ」

窓から見えるのは、多くの雷光虫が庭園の中を飛び回っている様子
だった。

雷光虫特有の青い光が、よく手入れされた庭園をより美しく見せる。
まるで幻想を見ているような錯覚に陥る。

父さんが俺を呼びにくるまでの間、俺たちは庭園を飛び交う雷光虫に釘付けになっていた。

「……さ……あ……も……はあ……い……」

声が聞こえる。
イズズか？

覚醒しきっていない脳が、声の主をイスズだと判断する。

「……も……が……ない……あ……はあ……」

イスズ……だよな？

だんだんと調子を取り戻す脳が、声の主はイスズだという判断に迷っている。

その時、突然腹部に重みを感じた。

そして脳は覚醒する。

「はあはあ……可愛いすぎる……なにこの寝顔……た、食べたい……この子がほしい、はあはあ……食べていいよね？……うん、食べよう……はあはあ」

コイツハイスズジャナイ！？

身の危険を感じ即座に瞼を開く。

すると眼前には、息を荒くしながら顔を近づける謎の人物がいた。

「ちえすとおおおおッ！！」ゴチンッ

「きゃう！！」

渾身の頭突きをかますと（もちろん手加減したよ？本気でやったら死ぬし）謎の人物は変な声をあげ、反り返りながら後ろへ倒れた。この隙に！と思い、身体を起こそうとするが……

「あ、あれ？」

身体が動かなかった。

まさかと思いつつ、唯一動く首を動かし身体を見ると……

拘束されていました、てへ☆

………

「外れろおおおおおお！！」がちゃがちゃッ

「ふふふ……人間の力じゃ外せないわよ、それ」

いつの間にか復活していた人物は、にやけながら拘束具を指差す。

……ん？人間の力じゃ外せない？

俺は両手に力をありったけ籠めて……

「ふっ！」バキバキメキッ

「な！？」

ふっふっふ、神からもらった力をなめるなよ。

ついでに両足の拘束具も、

バキバキッ

引きちぎってやった。

「え！？あ……うそ……」

「残念だったね……俺を拘束したいならグレイプニールくらい持つてこないと」

驚きのあまり立ち竦む人物……黒髪の少女の眼前に立ち、少女を見下ろ……せないから見上げる（ちっちゃくて悪かったな！）。

……よく見ると可愛いな……

膝裏まであるストレートの黒髪、若干タレ目に赤い瞳、右目の下にある泣きボクロ、すらっとした顔立ちをした美少女。一瞬ヤンデレになりそうな顔立ちをしていると思ったのは、内緒にしておこう。

「で？ いったいあなたは誰ですか？」

「え？ …え… っと…」

未だに驚いている少女を見てため息をつく。

鎖引きちぎることがそんなにおかしいか？

『怪奇！ 鎖を引きちぎる5歳児！』 …… うん。おかしいな。
自分でも訳分からんことを考えていると、突然肩に手が置かれた。

「あ、あなた本当に人間？」

「正真正銘の人間ですよ？ ちょっと力が強いですけど」

「ちよっとどころじゃないとおもうんだけど… …… でも、強い女の子か…。見た目は華奢な美少女… …… 実態は鎖をも引きちぎるスーパー美少女… …… ありね…」

この人さっきからブツブツ何言ってるの？

！？ もしかしてヤンデレモードか！？ 微かに口元もつり上がってるし… ……

これは逃げたほうがいいよな… …… ？

気づかれぬよう慎重に一步踏み出した時、突然何かの重みによってベットへ押し倒された。

「ちよっ！？ な、なんだいk 「はあはあ！ や、やっぱりあなたが欲しいわ！」 …… なんですと？」

結局振り出しに戻り、この状況。

もしかして……監禁フラグ建っちゃった？

後ろにはベット！後ろ以外魔王（人の限界を超越した意味で。主に
変態面）の包囲網！

絶対絶命！！果たしてケン・F・アステミアの運命は！？

次回につづく

第8話「天使と変態と魔王です。」（後書き）

〽次回予告〽

ゼ「は〜い☆みんなのアイドルゼウスで〜す☆」

ゼ「今回から、たまにやる次回予告の司会を務めることになりました〜☆

ちなみに毎回ゲストを呼ぶつもりなので皆さんよろしく〜☆」

ゼ「では次回予告の前に一つ。

作者。こんな地味な役で、あまり本編に出さない私への罪滅ぼしになると思ってるんですか？

もしそう思ってるいるなら、一回死んだほうがいいとおもいますよ☆」

作「orz」

ゼ「さて！駄作者はほつといて、さっそくゲストの方に来てもらいたいと思います！」

イ「こ、こんにちは！イスズ・F・アステミアです！」

ゼ「いきなり主人公を差し置いて妹さんですか。さすが魔王☆黒いですね☆」

イ「ま、魔王！？わたし魔王じゃないですよっ！」

第9話「天使と変態と魔王です。その2」

イズズside

おはようございます。イズズです。

突然ですが、わたしは今焦っています。

理由としては、朝起きたらおねえさまがいなかったんです！

トイレにしては長すぎるし……まさか拉致！？

これは由々しき事態です。おねえさまを捜さなければ！

というわけで、ただいま屋敷を捜索中です。

それにしても広いですね。迷っちゃいそうです。

おっと、目的を忘れるところでした。早くおねえさまを見つけなければ！！

「おや？ イズズ様どうかなさいましたか？」

振り返ると、そこにはレインフォード家の執事さんが立っていました。

「おはようございます」

「はい、おはようございます」

執事さんは微笑みながら挨拶を返してくれました。

あいさつは大事ですよ。おかあさまが言っていました。

「して、イスズ様はなぜここに？」

んゝ：おねえさまの搜索を手伝ってもつらたほうがいいでしょうか？
一人だと無理がありますし……よし！お願いしてみましよう！

「はい。おねえさまを捜していたんです」

「お姉さま…ですか？」

「はい、おねえさまです」

どうしたんでしょう？執事さんが何か考え込んでいます。
まさか、おねえさまのこと知らないんでしょうか。
おねえさまのことを知らないなんて…なんて愚かな。

「もしかして…ケン様のことでございますか？」

「はい。そうですけど？」

なんだ、知っているんじゃないですか。
しかし、何故苦笑なさっているんですか？

「して、探すとはいったい？」

「おねえさまがいなくなっただんです」

「いなくなる…お手洗いでは？」

「いえ、それはありません」

「そうですか…いつ頃からですか？」

「起きた時にはもう…」

「さようですか…では、こちらのほうで捜して見ますので、イスズ様はお部屋のほうへ…」

「いえ、わたしも捜します」

「いえ、しかし…」

わたしのおねえさまなのに、わたしが捜さないでどうするんですか！
わたしは執事さんを真剣な瞳で見続けます。

わたしが意地でも引かないことに気づいたのか、執事さんはため息
をついて目線をわたしに合わせてきました。

「イスズ様、決して無理だけはしないでください。イスズ様までお
いなくなりになったら、私の首がとんでしまいますから」

「はい、わかりました」

わたしがそう言うのと執事さんは、にっこりと微笑み踵を返した。
さて、おねえさま搜索の続きです！

くおとうさまとの遭遇く

「イスズ、こんなところでなにやっているんだ？」

曲がり角でおとうさまと遭遇しました。

「おねえさまを捜しているんです」

「ん？ケンがいないのか？」

「はい、朝から見当たらないのです」

おとうさまは顎に手をやり、何か考え始めました。

「うーん……………うん、そうだな。イスズ」

「はい、なんでしょう？」

「ケンなら大丈夫だ。そんなことより、今からパパとあす「おとう
さまはやっぱりおとうさまなのですね」……………イスズが…反抗

期だ…と…orz」

おとうさまが落ち込んでいるようですが、今はおねえさまです。
おとうさまに付き合っている暇なんてありません。

くレインフォード夫妻との遭遇く

「ケン君が見当たらない？」

先程遭遇したレインフォード夫妻に、おねえさまのことを尋ねています。

しかし真面目に考えてくれるあたり、おとうさまとは全然違います。

「ミーナのお部屋は行ったのかい？」

ラルクさんの隣に立っていたアンナさんが言いました。

なるほど、ミーナちゃんのお部屋とは盲点でした。

ありがとうございます、お2人とも。

出番が少なくても、なにかやらかさないあたり流石です。

くミーナちゃんのお部屋く

わたしは今、ミーナちゃんのお部屋の前にいます。

しかし、中々ノブに手をかけることができません。

だってミーナちゃんのお部屋ですよ？考えただけでも鼻血ものです。
きつとかわいいお部屋なんですよね。部屋を埋め尽くすほどのぬ

いぐるみの山、ぬいぐるみを掻き分けて進んだ先には、指を咥えながら眠りにつくミーナッ……危機一髪です。噴出しそうになりました。

しかし想像でこれなのに、実際お部屋に入ったりなんかしたら……：やばいですね。ミーナちゃんのお部屋で死体が出来上がってしまいます。

「む………いったいどうすれb「イスズちゃん？」ひゃっ!？」

前を見るとドアに手をかけたミーナちゃんがありました。

びっくりさせないでください。変な声が出ちゃったじゃないですか。

「ミ、ミーナちゃん?なんでわたしがいるのが分かったんですか?」

「んにゅう……ドアの向こうで気配がしたからあ」

ミーナちゃん、きっと将来大物になりますよ。

それにしても、ミーナちゃんは可愛いですね。

「それでイスズちゃんはどうしたのお?」

「はい。おねえさまを捜してるんです」

「ねえさまあ?」

「はい、おねえさまです」

「ん、おねえちゃんのお部屋には行ったあ?」

「おねえちゃん?」

驚きです。ミーナちゃんにはお姉さまがいたんですか。きっとミーナちゃんみたいで可愛いですよね。えへへ。

「昨日はずっとお部屋のいたんだけど、もしかしたらねえさまはお姉ちゃんのお部屋にいるんじゃないかな?」

「なるほど」

ありがとうございますミーナちゃん！さっそく行ってみます。
しかし、何故ミーナちゃんはおねえさまのことをねえさまと？
本妹はわたしですよミーナちゃん！
まあ、二号なら認めてあげます……。。

で、ついたのはいいんですけど……

「なんですか、これ……」

なぜここの部屋だけ鉄製の扉なのでしょう？

まさか！ミーナちゃんのお姉さまって魔獣なのですか！？

それなら納得です。

微かに中からおねえさまの悲鳴も聞こえてくる気がしますし……。

おねえさま！今イスズがお助けいたします！！

わたしは扉に手を掛け、開けようとしたんですが……重すぎます……。
 なんですかこれ！？ 本当に扉ですか！？

「あつ……ちよッ……やつ……」

「おねえさま!？」

やばいです！お、おねえさまが！！

お助けしたいですけど……この扉がつ！

「ちよつ……は……ああああああああああああ……」

おねえさま!!

わたしは何をしているんでしょう……。おねえさまが苦しんだときにわたしはッ！！

「おねえさま——！！！」

おねえさま……不甲斐ないわたしをお許してください……。

「……………イスズ……………く……………な……………ああああ……………あああ」

おねえさま！今わたしの名前をッ！？

そうです……おねえさまが助けを求めているのです……ならばわたしはうじうじしてないで、ただおねえさまの叫びに応えるだけ……！！！！

「！！！！！！！！」

ゴ
ツ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ

開い……たっ……！ やっぱり愛の力は凄いです……！！

「おねえさま!! イスズがお助けにき…ま……した……」

部屋に飛び込んだわたしの目に入ったものは、上半身裸のおねえさまと、おねえさまに馬乗りをしてる女の人でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3129u/>

転生高校生の魔法生活

2011年7月26日03時14分発行